

論文内容の要約

「初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムの開発と評価ー子どもの両親との役割関係
葛藤の解消に向けてー」

岩手県立大学大学院 看護学研究科

木村 志穂

1. 研究の背景

わが国では古くから里帰りの慣習があり、核家族化が進む現代においても、妊婦は出産前から実家に帰省し、実父母からの支援を受けている。このように、産褥早期は多くの家庭において拡大家族の協力のもとで育児が行われている。こうした家族背景には、夫の育児休業取得率が2012年には1.89%と、夫には育児休業が活用されていない現状があるとともに、子どもの父親が家事や育児にかかる時間は1日平均で1時間という現状があり（総務省統計局, 2012）、出産直後から夫の協力の希薄さが関係している。そのため、現代においても祖父母が育児支援のキーパーソンとして重要な役割を担っている。しかしながら、実母による支配的・回避的なサポートが母娘関係の緊張や母子愛着障害のリスクとなっていたり（白井ら, 2006）、また身近に祖母がいる母親の約1割が、実母との育児観の相違からストレスを感じているという実態がある（研究者, 2009）。さらには、世代別、地域別の社会によって役割イメージに差があり（宗像, 1996）、祖父母と子どもの両親との間で、互いの役割期待と遂行の仕方にズレが生じやすく、役割関係葛藤が生じている現状がある。

そこで、看護者が家族員の関係性にアプローチしていくプログラムが必要であると考えた。妊娠期に、祖父母や親になる夫婦との関係性に働きかけた看護援助の研究は行われておらず、家族の関係性に働きかける支援方法は確立されていない。孫の育児において、祖父母と子どもの両親との役割関係葛藤が少なく、祖父母の力を発揮できるようになるためには、祖父母に対して孫の出産前に教育を行い、祖父母としての役割獲得プロセスが円滑に移行できるようなプログラムと、家族の関係性にアプローチしたプログラムの開発が必要である。

2. 研究目的

本研究は初孫を迎える祖父母を対象に、子どもの両親との役割関係葛藤の解消に向けて、祖父母役割獲得の促進と、子どもの両親との関係性の強化に向けた教育プログラムを開発し、評価することである。

3. 研究方法

2部構成からなる教育プログラムを作成し、第1部は「現代の育児を理解する」、第2部は

「子どもの両親との関係性を見直しを図る」とした。本プログラムは、妊娠 30 週以降の初産婦をもつ祖父母とその家族を対象に、勤労世代である家族員が参加しやすい土曜日の午後で開催し、全 2 回、各 2 時間で行った。プログラムの内容は、現代の育児に関する知識や技術の提供を行うとともに、祖父母が子どもの両親と向き合う機会を設け、子どもの両親との関係性の強化を図るためにグループワークを行った。グループワークでは、地域で多くの母子とその家族に関わっている経験の豊富な助産師にファシリテーターとして協力してもらった。助産師は母子とその家族が本質的にもっている能力を最大限に発揮できるよう支援していく専門家である。その専門性を生かし、それぞれの家族が抱えている悩みを引き出すことで、家族が互いを理解し、解決の方向性を見いだせるように関わった。家族員 1 人 1 人が自分の思いを語る時間を設け、ファシリテーターは家族員の思いを解釈し、他の家族員に伝えていく役割を担った。さらに、育児において役割関係葛藤が生じた際に、祖父母としてどのように対応していくかについても話し合った。

プログラムの評価は、①グループワークにおける参加者の語りの内容、②3 つの尺度（役割受容尺度、家族機能測定尺度、情緒的役割関係葛藤尺度）と祖父母の役割獲得状況に関して独自に作成した質問紙調査（介入前、産後 3 ヶ月時）、③面接調査（産後 3 ヶ月時）、の 3 つの方法で行った。質的データについては内容分析を行い、質問紙調査についてはプログラム実施前後での得点比較をし、Wilcoxon の符号付き順位検定を行った。

4. 結果

初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムを開発し、2 日間の教育プログラムを実施したところ、9 組の家族、合計 45 名が参加した。

質問紙調査について分析をした結果、プログラムに参加したことにより、祖父母の役割獲得状況において、「現代の育児についての知識がなく不安だ」、「育児に関する技術ができるか不安だ」、「祖父母として育児にどのように関わったらよいかわからない」、「育児を手伝っていく上でどこまで介入してよいか子ども夫婦に遠慮がある」という、4 つの項目においてプログラム実施後、有意に得点が下がっていた。また、「子ども夫婦から求められている祖父母の役割について理解している」という項目において、プログラム実施後、得点が有意に上がっていた。一方、役割受容尺度、家族機能測定尺度、情緒的役割関係葛藤尺度の 3 つについては、プログラム実施前後で有意な差は認められなかった。

第 2 部「子どもの両親との関係性を見直しを図る」において、グループワークを実施し、参加者の語りの内容を質的に分析した結果、＜家族員相互の理解の場＞という効果が得られた。また、祖父はグループワークにおいて、育児における過去の反省を言葉にしたり、他の家族員の思いを知ることによって＜祖父母としての役割受容＞ができ、孫の育児に向けて役割意識が高まっていた。

産後 3 か月時に面接調査を実施したところ、本プログラムに参加したことで、すべての家

族において、祖父母は子どもの両親との間で役割関係葛藤が増大することなく、祖父母としての役割を遂行していた。第1部の「現代の育児を理解する」というプログラムにて、現代の育児について根拠に基づき説明をすることにより、祖父母は＜現代の育児に対する共通理解＞を示し、子どもの両親との間で、時代背景による育児観のギャップを生じることなく、育児を遂行していた。また、育児経験のある祖母は、講話や沐浴演習を通して、＜孫の育児への自信が付き＞、孫の育児において手段的側面で子どもの両親をサポートしていた。産後3ヶ月までの間に、祖父母は子どもの母親との間で役割関係葛藤が生じた際に、祖母は子どもの母親を保護したり、家族員間の調整を図っていた。また、手段的側面での役割調整だけでなく、情緒的側面においても子どもの母親をサポートし、育児が円滑に行えるように支援していた。本プログラムに参加した半数の祖父は、育児経験の少ない祖父であったが、沐浴演習を行うことで、＜孫の育児へのきっかけづくり＞となり、手段的側面で子どもの両親をサポートすることができていた。

5. 考察

本研究の予備調査で、初孫の育児における役割関係葛藤の要因について調査した結果、【時代背景による育児観のギャップ】や【子どもの両親とのコミュニケーションの困難さ】から子どもの両親との間で役割関係葛藤が生じていた。さらに、現代の特徴として、妊娠先行婚の増加により、妊娠期に義父母と嫁との間で家族関係が築けないまま、出産、育児に至っている現状がある。そのため、育児において家族でコミュニケーションを図ることが難しい現状になっていると考えられる。

今回、本プログラムに参加した祖父母は、現代の育児についての知識と技術への不安や、育児への祖父母としての関わり方に不安を持っていたが、プログラムへの参加によってこうした不安は減少し、祖父母としての役割についての理解が高まっていた。このことから、本プログラムは祖父母の育児対処能力を高め、祖父母としての役割を認識できるようになると考える。また、産後3か月の時点において、祖父母は本プログラム参加前よりも、育児において子ども夫婦に対する遠慮が有意に減少しており、妊娠中から家族の関係性にアプローチしたことが効果的であったと考える。

プログラムに参加した祖父のうち半数は、自身の子どもを育てていた時代には仕事中心で、育児に携わる機会が少なかった。しかし、沐浴演習において新生児人形を抱っこしたり、おむつを交換したりして、新生児に触れるという体験をすることで、＜孫の育児へのきっかけづくり＞となり、改めて自分が祖父母となるということを認識させ、＜祖父母としての役割受容＞につながるといえる。現在、各地で行われている母親学級や両親学級に一部の祖母は参加しているが、祖父の参加はほとんど見受けられない。しかし、孫の育児に向けて、祖父の気持ちを引き出すようなプログラムを行うことで、育児において祖父の力を有効に発揮できると考える。育児経験のある祖母に対しては、孫の出産前に現代の育児に関する知識や技

術を提供することで現代の育児について共通理解を示すとともに、過去の経験を思い出し、育児においてその力を発揮できると考える。

さらに、本教育プログラムでは祖父母だけではなく、子どもの両親の参加を促し、妊娠中に家族で話し合う場を設定したことで、育児において家族で随時話し合うことができ、役割関係葛藤の増大を防いでいた。今回参加した家族のうち、実父母と娘との関係においても、妊娠中にじっくり互いの役割について話す機会は少なく、祖母に対して子どもの両親から漠然とした依頼はあっても、具体的な話し合いの場をもつ家族は少ない状況であった。育児期における家族への介入方法には新生児訪問等もあるが、家族員全員が一度に集うことは難しい状況である。そのため、今回のプログラムのように妊娠中に家族員全員を対象としたプログラムは重要であり、さらにグループワークにおいて1人1人がじっくり話す時間を設け、互いの思いを知る機会を持つことは貴重な場であったと考える。

祖父母という役割を遂行していくにあたり、グループワークを通して、自身の過去を振り返り、思いを語るという作業を行うことで、祖父母としての役割受容につながる事が明らかとなった。妊娠期から育児期にかけて、「親」から「祖父母」へと役割が変化する時期であるからこそ、短時間でも時間をとって互いに向き合って話し合う場が必要であると考えられる。

6. まとめ

本プログラムでは育児における役割関係葛藤の解消に向けて、初孫を迎える祖父母に対して、現行のプログラムで行われている育児に関する知識や技術の提供に加え、妊娠中に家族で話し合う場を設けるグループワークを行ったことで、祖父母としての役割獲得を促進させ、家族関係の強化につながるという効果が得られた。宗像（1996）は、家族間の役割調整を行うことで、気持ちの通じ合う人間関係を回復させたり、お互いの良さを理解し合うことによって、気持ちが通じ合える人間関係を回復することができるかと述べている。単に育児の知識を提供するだけではなく、家族の関係性にアプローチするというプログラムによって、本来家族の持っている機能を高めることができ、育児において役割関係葛藤が増大することなく、祖父母としての役割を遂行することができたと考える。

本プログラムは2部構成にしたが、第1部のテーマである「現代の育児を理解する」によって、祖父母としての育児対処能力が高まり、その上で、第2部のテーマである「子どもの両親との関係性の見直しを図る」によって家族が互いの思いを理解することができていた。その結果、産後3か月の時点において、祖父母として子どもの両親を手段的あるいは情緒的側面から支え、子どもの両親から頼られながら、家族全員で育児を遂行することができていた。以上のことから、妊娠中に祖父母と子どもの両親を集い、育児に向けて家族の関係性にアプローチしていく本教育プログラムは、育児において祖父母と子どもの両親との役割関係葛藤の増大を防ぐことに効果的であったと考える。